

教育開発支援 NEWS LETTER

March 2026

No.

52

ダッシュボードの活用方法 01~04

教育開発支援委員会

ネットワーク情報学部における学修ポートフォリオを用いた学修成果の可視化について 05~08

副学長 ネットワーク情報学部 教授 松永 賢次

ダッシュボードの活用方法

教育開発支援委員会

1. 背景と目的： 内部質保証を“データで語る”ために

本学では、内部質保証の実効性を高めるため、教務情報システム・入試システム・学習管理システム（LMS）等に散在するデータの横断活用を進めてきました。RStudioで各種データを結合・整形し、分析可能な形に統合した上で、Google Looker Studioにより可視化することで、誰もが同じ指標と視点で学修成果を確認できるダッシュボード環境を整えています。学内で広く活用していただくことを目的に、利用方法をご案内いたします。

現在、卒業生データを起点としたダッシュボードを公開しており、専修大学のGmailアカウントでログインしたブラウザからアクセスが可能です。

- 令和3（2021）年度卒業生
<https://lookerstudio.google.com/reporting/abea5fcf-815e-4f74-a36f-84ec6ae2785a>
- 令和4（2022）年度卒業生
<https://lookerstudio.google.com/reporting/633a0112-176a-4f5c-95a0-2d4076456b8d>
- 令和5（2023）年度卒業生
<https://lookerstudio.google.com/reporting/9e6660f7-cab5-491c-bb57-28369b24cdfc>
- 令和6（2024）年度卒業生
<https://lookerstudio.google.com/reporting/c7d778ef-065e-43cf-852f-4b01b1d016e4>

2. ダッシュボード全体像と“できること”

本ダッシュボードは、(1) 卒業生基本情報、(2) 科目ナンバリング集計、(3) カリキュラム・

マップと成績、(4) アセスメントテスト（GPS-Academic）とGPA推移、という4つの観点で構成されています。各ページは、表中の項目をクリックすると該当対象が他のグラフ・表に連動して反映され、グラフ上にポインターを合わせるだけで具体的な数値がポップアップ表示されます。さらに、指標の切替（「オプションの指標」）や、学部→学科へのドリルダウンなど、直感的な操作で必要な粒度の情報に到達できます。

ダッシュボードにアクセスすると、次のような画面が表示されます。この画面は「2024年度卒業生の基本情報」を表示した画面になります。



左上の「学部」の表で、確認したい学部名をクリックすることで、全学のデータから、当該学部のデータに絞り込むことができます。さらに、当該学部の「学科・コース」をクリックし選択することで学科・コースごとの、「入学試験区分」をクリックすることで入学試験区分ごとの絞り込みができます。

例えば、経済学部を選択すれば、「学科・コース」は経済学部の各学科に変わります。

学部

学部順序	学部名称	卒業生数	確定累積GPA
1	経済学部	647	2.64
2	法学部	646	2.51
3	経営学部	510	2.77
4	商学部	577	2.69
5	文学部	562	2.82
6	ネットワーク情報学...	190	2.75
...	総計	3,534	2.72

1-8/8 < >

学科・コース

学科名称	卒業生数	確定累積GPA
現代経済学科	239	2.69
生活環境経済学科	229	2.66
国際経済学科	179	2.57
...
総計	647	2.64

1-3/3 < >

それにもない、画面中央の平均 GPA も全学の卒業生対象の値から、経済学部の卒業生の値に変化します。



そのほか、入試制度ごとの GPA や、GPA の分布（ヒストグラム）等を表示することができます。

3. ページ別の見どころと活用の勘所

(1) 卒業生基本情報（2022年度卒業生）

ページ冒頭の学部／学科・コース／入学試験区分の表をクリックすると、ページ内の卒業生数・平均 GPA、GPA の比較・分布、入試制度×学科の GPA 集計、出身都道府県の分布などが連動して更新されます。項目にポインターを合わせれば具体的な値が表示され、学部間・学科間の比較や入試施策検討に資する基礎情報を即座に抽出できます。

たとえば、「学部」の表で経済学部をクリックすると、同学部の卒業生数や平均 GPA、GPA 分布、入試区分別の傾向などをまとめて俯瞰できます。これにより、厳格な成績評価がどの程度実現できているか、学科間のばらつきがないか、といった確認を短時間で行えます。

(2) 科目ナンバリング（分野コード集計）

学部名称／学科名称／専攻・コースを画面上部のメニューからチェックボタンで選択し、分野コード一覧の表から関心領域をクリックすると、分野コード別の合計修得単位数と一人当たり平均修得単位数がグラフ・表で表示されます。

左側の「分野コード一覧」の項目（分野コード、科目の分野、合計修得単位数、一人当たりの平均修得単位数）をクリックすれば、項目ごとの並び替え（例えば、一人当たりの平均修得単位数の多い順）が可能です。以下の例は、「学部名称」で経営学部を選択した際の表示例です。

2024年度卒業生の科目ナンバリング集計

学部名称: 経営学部
学科名称:
専攻・コース名称:

分野コード一覧

分野コード	科目の分野	合計修得単位数	一人当たりの平均修得単位数
ACC	会科学	3,628	6.95
ARL	芸術一般	206	0.42
CHI	中国語	44	0.08
CIL	良導法	238	0.46
CME	商学	9,790	19.62
CRE	キャリア科目(キ...	1,036	2.02
CUA	文化人類学・民俗...	72	0.15
ECT	理論経済学	904	1.76
EDU	教育学	362	0.72
ENG	英語一般	326	0.61
EPE	経済学・政治経済...	4,330	8.23
ERL	英語 読む・書く...	2,065	4.04
ESW	英語 話す・書く...	1,933	3.83
ETH	倫理学	454	0.88
FAH	美術史	4	0.01
FUL	基礎法	38	0.07
GGR	地理学一般	48	0.1
GPS	心理学一般	1,356	2.71
HOT	思想史	10	0.03
HSG	史学一般	418	0.79
ICT	情報通信技術	2,792	5.46
IDS	融合領域科目(学...	928	1.88
INS	情報システム	1,386	2.68
JAC	日本文化	2	0.01
JPH	日本史	8	0.02
JPN	日本語	64	0.15
YDU	21世紀キリシム	167	0.33

分野コード別一人当たりの平均修得単位数と合計修得単位数のグラフ

分野コード別合計修得単位数と一人当たりの平均修得単位数の集計表

学部順序	学部名称	専攻・コース名称	対象学生数	ACC_会...	ARL_芸...	CHI_中...	CIL_良...	CME_商...	CRE_キ...	CUA_文...	ECT_理...	EDU_教...	ENG_英...	EPE_理...	ERL_英...	総計
7	経営学科	null	331	7.5	0.36	0.11	0.47	18.19	2.05	0.11	1.81	0.68	0.71	9.11	4.07	127.44
8	ビジネスデザイン学科	null	179	6.39	0.48	0.04	0.46	21.05	2	0.2	1.71	0.77	0.5	7.34	4.02	127.44

ダッシュボードの活用方法

分野コードもしくは科目の分野を選択（複数を選択する場合、WindowsではCtrlを、Macではcommandを押しながら選択）すれば、その分野の単位修得状況を確認することができます。例えば、経営学部の卒業生を対象にNSC（自然科学一般）、STS（統計科学）、MAT（数理科学）の3分野を選択すると、次のような表示になります。

2024年度の経営学部の卒業生は、NSC（自然科学一般）に分類される科目の単位を経営学科で6.37単位、ビジネスデザイン学科で5.41単位、STS（統計科学）に分類される科目を経営学科で

2.14単位、ビジネスデザイン学科で2.16単位修得しているのに対し、MAT（数理科学）に分類される科目の修得単位数は0.15と0.2となっていることがわかります。修得単位数ですので、一般的な講義科目を想定すれば、この値が2.0よりも小さい場合は、平均して1科目分の単位も修得していないということがわかります。

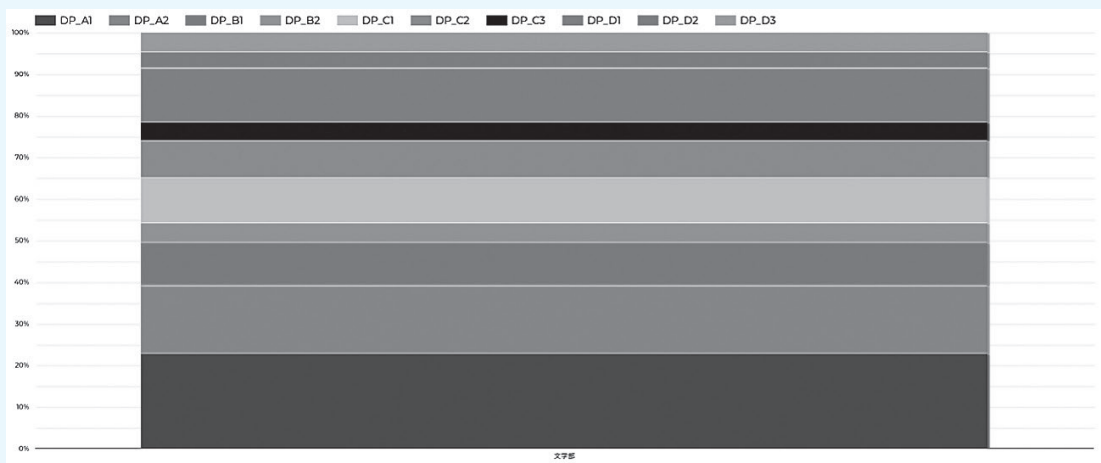
DP・CPで必要と想定した科目(群)を学生が履修し、単位を修得しているか、といった教育課程の狙いと学生の履修実態の一致・不一致を点検できます。



(3) カリキュラム・マップと成績情報

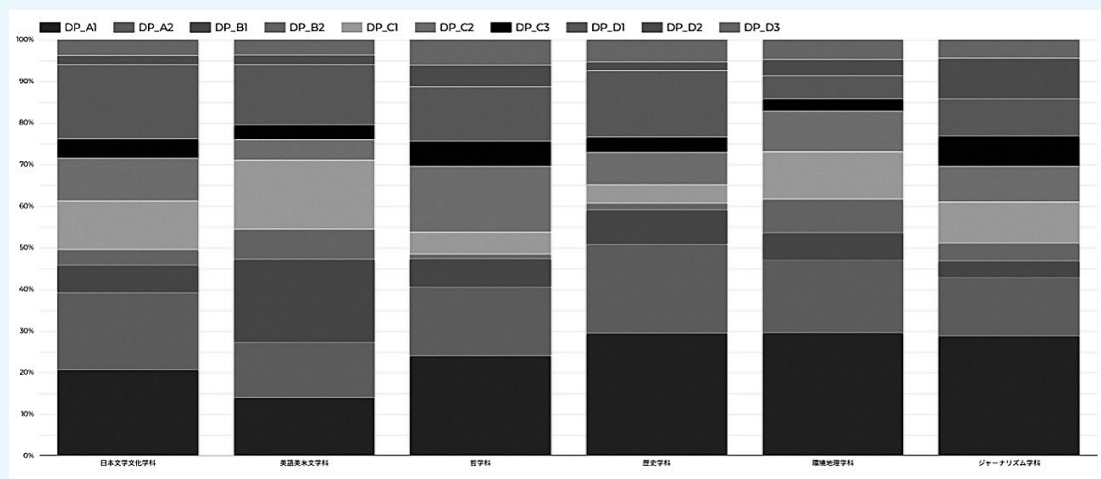
各学部作成のカリキュラム・マップに基づき、卒業時点での合計修得単位数に占める DP（共通観点第3階層）ごとの割合を、学部・学科単位で確認

できます。円グラフや棒グラフをドリルダウンしながら学科間の比較も可能です。例えば、文学部を選択すると、学部全体の合計修得単位数におけるディプロマポリシーの割合が表示されますが、



図の上部にカーソルを合わせた際に表示される「↓」を押してドリルダウンすると、文学部の各

学科の合計修得単位数におけるディプロマポリシーの割合が表示されます。



(4) アセスメントテスト(GPS-Academic)とGPA

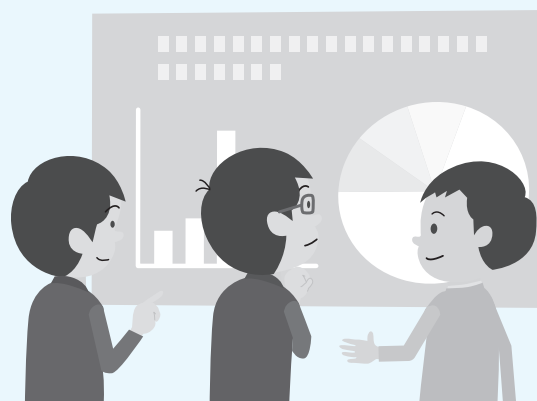
GPS-Academic 主要スコア（思考力総合、リーダーシップ、レジリエンス、コラボレーション、学びへの意欲、経験）と GPA の推移を、学部・学科・専攻／コース単位で表示します。上段の棒グラフと下段の集計表は連動し、受検者数や確定年度内 GPA などの指標を必要に応じて切り替えられます。年次推移の俯瞰により、教育改善施策の成果や課題の兆しを定量的に捉えられます。

4. 今後の活用に向けて

専修大学では、教育の質保証の実効性を高めるため、アセスメントプランを策定し、毎年度の「モニタリング」と、3～5年に一度の「プログラムレビュー」という二層構造で点検・評価を行っています。モニタリングでは、「改善すべきポイントの明確化」や「機動性のある改善策の実施」を目的として、特定の指標に関するデータを継続的に収集し、目標の進捗状況や達成度、学生の学修状況を自己省察することが求められています。

一方、プログラムレビューは、「現状の発展・向上、優良事例の認識と共有」「学外への説明責任の履行」「カリキュラム改正に資する基礎資料の提供」を目的とし、学位プログラム全体および授業科目について包括的な評価を行うものです。これらの取り組みにおいては、各教育課程運営機関がダッシュボードを用いて現行カリキュラムの点検・評価を行うことが想定されており、すでにその活用が進んでいます。

令和7年度までに、現行カリキュラムを対象としたプログラムレビューが実施され、その際にはダッシュボードが活用されました。また、令和8年度から運用が始まる新カリキュラムについても改善できた点と改善に至らなかった点が明確になっています。この新カリキュラムについても、ダッシュボードを活用した継続的な検証を行うことで、改善の成果や新たな課題を可視化し、次期カリキュラム改訂へとつなげていくことが期待されます。このように、データに基づく点検・評価を継続し、その結果を教育改善のサイクルに反映させていくことが、教育の質保証の高度化につながり、ひいては学修者本位の教育の実質化に資するものと考えられます。



ネットワーク情報学部における学修ポートフォリオを用いた学修成果の可視化について

副学長 ネットワーク情報学部 教授 松永 賢次

本稿は、No.40（2020年3月）に寄稿した「ネットワーク情報学部生を対象とした汎用的技能の学修成果の検証について」の「今後に向けて」に記述したことを報告する内容となっている。

客観テストやアンケートだけではコンピテンシー領域の能力向上を測定することは難しいので、その対策として、本学部では、2019年度入学生から、4年次に「卒業能力認定」*という科目を用意している。この科目では、学生本人が、ジェネリックスキルも含めた能力を、大学の学びを通じてどれだけ身に付けたか、プレゼンテーションさせる計画である。そのための道具として、1年次からの学びで作成したレポートや経験を学生個々がまとめた学修ポートフォリオを活用することを想定している。

* 4年次の新科目の名称は「修了能力認定S」と「修了能力認定D」となっている。2019年入学生カリキュラムから、SコースとDコースの2コース制をとっており、コース毎に、科目を設けたことになる。

以下、ネットワーク情報学部では「1年次からの学びで作成したレポートや経験を学生個々がまとめた学修ポートフォリオ」をどのように作らせているのかについて述べていく。

その後、筆者が担当している「修了能力認定S」において、「学生本人が、ジェネリックスキルも含めた能力を、大学の学びを通じてどれだけ身に付けたか」を説明するための観点をどのように与えているのか、その取り組みについて述べていく。

1. ネットワーク情報学部での学修ポートフォリオ

「学修ポートフォリオ」とは、「教学マネジメント指針」用語解説（令和2年1月22日文科科学省中央教育審議会大学分科会）において、次のように説明されている。

学生が、学修過程ならびに各種の学修成果（例えば、学修目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など）を長期にわたって収集し、記録したもの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて

到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつめてステップアップを図るといふ、学生自身の自己省察を可能とすることにより、自立的な学修をより深化させることを目的とする。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される。

本学部では、2001年の設立当初から、多くの科目で課題レポートを課し、それをLMS（Learning Management System）にファイルとして提出するということが行われていた。学生たちの学修履歴となる数多くのファイルが、LMSのサーバ上に蓄積されているのだから、それらを学生自ら編集して学修ポートフォリオとすることができるだろう、ということ考えた。学修ポートフォリオを作成・管理するシステムも商品化されているが、本学部の学生であれば、専修大学で導入済みの汎用ソフトを活用して作成できると考え、Google Workspaceにある様々なツールを活用し、ホームページ作成ツールのGoogle Sites上で作成・編集してもらうことにした。

すべての課題レポートを、学修ポートフォリオに載せるのではなく、本学部のDP（卒業認定・学位授与の方針。図1）を細分化した階層（図2）ごとにWebページを作ってもらい、その項目にあわせた課題レポートと、それがどのようにDP項目と関連した成果なのかを200字以上で記述して整理してもらっている。これによって、学生がDPを基準として意識して、何ができるようになっていくのかを確認できるようになると考えた。

4年次の科目「修了能力認定」を受講して初めて学修ポートフォリオを作るのではなく、各学年の終わりに、春休み課題として段階的に作成してもらうように、学部として運営している。

1年次では授業期間内に、2年次以降でのコース選択などに関連するコース・プログラム説明会という催しを年に3回行っている。その3回目に、1年次末での学修ポートフォリオの記述項目について指示をしている。2年次では後期に、選択必修科目の「応用演習」の授業があり、そこで、2

ネットワーク情報学部 卒業認定・学位授与の方針

ネットワーク情報学部は、情報学およびそれに関わる社会・人間・環境・技術・数理の包括的な教育研究を通じて、地球的視野に基づき他者と協働し、科学的かつ創造的に問題解決できる能力を有する人材を養成することを目的とします。次に掲げる目標を達成した学生に学士（情報学）の学位を授与します。

DP1 知識・理解

情報学に関する知識及びそれを扱う原理・機構・人間、社会への応用について体系的に理解し、多様で幅広い一般の知識を援用しながら、それらについて説明することができる。

DP2 汎用的技能

人工言語（プログラミング・数学など）、自然言語（日本語・外国語）を用いてコミュニケーションを行うスキル、データを扱うスキル、情報ツールを利用するスキル、デザイン創造活動を遂行するスキルを身に付け、活用することができる。

DP3 知識体系に基づく思考と知の創出

社会における様々な問題に対して、情報学の観点から自分の持つ知識や技能を統合し、論理的思考プロセスと創造的思考プロセス（調査・分析・仮説生成・創造・表現・説明・評価・改善）を実行し問題解決することができる。

DP4 態度・志向性

社会における多様な価値観、人間と地球環境の関係性などによる問題の多面性を考慮した上で、社会的責任と倫理感を持ちつつ他者と協働し、よりよく生きるためのデザインとして取り組むことができる。また、それらに関する知識・技能を自ら学習することができる。

図 1

学修ポートフォリオ 階層構造

- DP1 情報学の専門知識**
 - DP1-1 情報学の基礎的な専門知識
 - DP1-2 幅広い領域の知識・理解
- DP2 情報を扱うスキル**
 - DP2-1 言語運用能力
 - DP2-1a 日本語
 - DP2-1b 外国語
 - DP2-2 情報・データリテラシー
 - DP2-2a 情報ツール
 - DP2-2b 数理的思考法
 - DP2-2c システム思考・モデル化
 - DP2-2d プログラミング
 - DP2-2e データに基づく思考
 - DP2-2f デザイン・創造活動
- DP3 知識体系に基づく思考と知の創出**
 - DP3-1 知識の統合と活用
 - DP3-2 論理的思考力
 - DP3-3 問題解決力
- DP4 態度・志向性**
 - DP4-1 多様な価値観の受け入れ
 - DP4-2 倫理観と社会的責任
 - DP4-3 自己設計・管理力

図 2

年次末での学修ポートフォリオの記述項目について指示をしている。3年次には、通年の必修演習科目である「プロジェクト」があり、ここでは2年次までに修得したスキルや経験を、担当教員および学生同士が理解するためのツールとして、学修ポートフォリオを活用するように促している。

各学年の終わりに、DPの項目毎に、どの科目の内容を記述するのか、コース毎にガイドラインを示している。これは科目マップ（科目がどのDPに対応しているのか、その割合を含めた表）に基づいて、教務委員会で確認している。科目マップに割合が書いていない場合でも、実際の授業で学習していれば、それを含めて記述しても良いこととしている。

以上述べた取り組みの効果を、本誌の毎年11月発行号で報告されているGPS-Academicの回答分析に基づいて確認していく。

「DPの学生認知度」に関する設問に対しては、明らかな変化が2021年以降のネットワーク情報学部生の回答から確認できる。「1_内容を知っている」と回答した割合が、2021年には、ネットワーク情報学部2年次で26.8%と全学部の中でトップになり、2022年になるとネットワーク情報学部4年次が41.9%、3年次が30.8%と、他学部とは明らかに大きい回答割合となっている。この傾向は2025年まで続いている。

ネットワーク情報学部における学修ポートフォリオを用いた学修成果の可視化について

「専門的知識・技能、思考方法についての成長実感」に関する設問に対しては、「1_身についての実感がある」と回答した学生が、2023年以降(30.4%, 40.9%, 30.0%)、3年連続ネットワーク情報学部4年次以上がトップとなっており、2019年のカリキュラム改訂とあわせて導入した学修ポートフォリオ作成の効果ができていると考えている。

2. 「修了能力認定S」での試み

「修了能力認定S」は、2019年度入学生からのSコース用の4年次必修科目であり、2022年度から筆者が科目担当者として、前期にオンデマンド授業として実施することとなった。オンデマンド授業においても、学生同士がコラボレーションできるように、Google Workspaceの様々な機能を積極的に活用している。

基本的な授業の構成は、授業6回程度をかけて、以下の内容を行う。

- Google Sites上に作成した学修ポートフォリオに対して、10人程度で1つのグループを教員が作成し、グループ内で相互レビューを行い、Google スプレッドシートの共有評価シートに気がついたことを記入する。
- 指摘を受けた内容に基づき学修ポートフォリオを改善し、改善した内容を、共有評価シートに記入する。

DPを、DP2-2を中心とした「情報・データリテラシーに関連する汎用的技能(スキル)」と、DP3を中心とした「創造的な問題解決活動に関連するもの」に分けることで、2週で全体を相互レビューするようにした。最後に、教員向けに20~30分程度のまとめのプレゼンテーション動画を撮影してもらい、それを提出してもらうこととした。

初年度、学生たちが提出した動画を見ると、ネットワーク情報学部では、DPの各項目を学習する機会が、筆者の想像以上に多岐にわたっていることが確認できた。2018年度以前の入学者では、2年次までの演習科目は、必修または選択必修と充実している一方、3年次以降では「プロジェクト」以外は選択科目となっていたため、4年次での学生アンケートにおいて、より充実してほしいという意見が出ていた。そこで2019年度以降の入学生カリキュラムでは、コース毎に3年次以降の演習科目の充実をはかるようにしていた。そのカリキュラム改定の狙いが、学生たちの報告から効果をあげているということが、具体的に理解できた。

その一方、課題として取り組んだ内容を、DPで掲げている能力に変換して、どの程度身に付けられているのか、うまく説明できない学生たちが、半数以上いるということもわかってきた。そこで、説明の観点の提示して、その観点の一部には、ルーブリックのような評価の目安となる段階基準も示すようにして、それを参照して整理してもらうようにした。

(1) 情報・データリテラシーに関連する汎用的技能(スキル)に対する観点

「情報・データリテラシーに関連する汎用的技能(スキル)」を修得する機会は、ネットワーク情報学部では、1年次から豊富に用意されており、主としてパソコン上のツール(アプリケーションソフト)を使いながらスキルを身に付けていく。1年次であれば、ツールの基本的な操作から丁寧に教員が教えて、それを活用する練習課題を用意するだろう。Sコースの学生が2年生以降主に使用するツールとして想定されるのは、システム開発・データ分析とそれをするためのモデリングやプログラミングが主であるが、グループで活動することが多い本学部では、グループウェアも重要になってきている。

上級生になるにつれ、ツールの存在は教員が教えるものの使い方は学生自らが学ぶようになり、さらには有効なツールを学生自ら探していくというようにレベルが上がっていくだろう。同じツールを使う場合でも、解決すべき問題の大きさや、複雑さが変われば、必要なレベルは変わってくる。グループで同じツールを活用してタスクを進める場合には、利用のルールやガイドラインを、試行錯誤しながら進めていく工夫も必要になる。

このような学生の創意工夫を含めて、学生が自身の到達度を客観的に評価できるようにするため、図3に示す観点と基準を用意することにした。学修ポートフォリオで取り上げたスキルとそれを運用するツールごとに、どのレベルまで活用できるようになったのかを、相互レビューの際に示してもらうようにした。

(2) 創造的な問題解決活動に対する観点

「創造的な問題解決活動」に対しては、学修ポートフォリオの中から、1ヶ月以上の期間をかけた活動を3~5個取り上げてもらい、その活動の中でどのような経験ができたのかを客観的に評価で

ネットワーク情報学部における学修ポートフォリオを用いた学修成果の可視化について

ツールの活用水準に関する観点と尺度

<p>ツールを活用して取り組む対象の大きさ、複雑さ、難しさ</p>	<p>ツールを誰が紹介したのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 教員や仲間に表示された（学習方法も） 2 教員や仲間に表示されたが、自分で学習した 3 自分で探して学習した 	<p>ツールの使い方の工夫をしたのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 しない 2 した（自分だけの範囲） 3 した上で、仲間にもその工夫を紹介した 4 した上で、仲間にもその工夫を広げて実践された
-----------------------------------	--	---

図3

創造的な問題解決活動の水準に関する観点と尺度

<p>どの範囲を扱ったのか 調査・分析・仮説生成・創造・表現・説明・評価・改善</p>	<p>誰が問題を持ってきたのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 教員や仲間が持ってきた 2 教員や仲間が持ってきたが、自分で問題を追究して具体化した 3 自分が持ってきた 	<p>誰の問題を扱ったのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分だけ 2 身近な人たち（同じ学部の同級生など） 3 少し遠い人たち（同じ大学の別の学部の学生など） 4 見知らぬ人たち（学外の人たちなど）
<p>分析は自分たちで行っているのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 分析はしていない 2 他人の調査結果を利用して分析した 3 調査から自分たちで行い、その結果から分析している 	<p>解決案の創造性（新奇性/独自性）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 既に実例はあるが自分たちで実現できるように工夫した 2 他に類例を見ないオリジナル 	<p>解決案の実現度合い</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 紙の上の提案 2 部分的に実現・実施した（部分的に他人が体験できる） 3 ほとんど実現・実施した（他人が体験できる）
<p>必要となった知識・スキル（授業扱い）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 授業で学んできた知識・スキルが必要 2 授業で扱わなかったような知識・スキルが必要 	<p>必要となった知識・スキル（専門領域）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報学の範囲の知識でできる 2 他の学問分野の知識が必要 	<p>誰と一緒にやったのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分だけ 2 身近な人たち（同じ学部の同級生など） 3 少し遠い人たち（同じ大学の別の学部の学生など） 4 見知らぬ人たち（学外の人たちなど）
<p>誰に報告・発表したのか。誰に評価してもらったのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 同じグループの中 2 担当教員、同じクラスの別のグループの学生 3 担当ではない教員、クラス外の同じ大学の学生 4 対象とする問題をかかえている部外者 	<p>倫理的考慮をしたのか？</p>	<p>評価に基づく改善を実際に行ったのか？</p>

図4

きるよう、図4に示す観点と基準を学生に示し、スプレッドシートに整理してもらうようにした。

DP3で示されている「知識の統合と活用」といった項目だけではなく、例えば「自分の身近な範囲を超える対象とする問題を扱っているのか」や「倫理的考慮」といった、DP4（態度・志向性）と関連するコンピテンシー（行動特性）が、実際の多様な価値観が交錯する問題解決の場面で活用できているかどうかを確認してもらう内容となっている。

3. まとめと今後に向けて

本稿では、ネットワーク情報学部で進めている、DPによって系統立てて整理を行う学修ポートフォリオについて取り上げた。学生が、カリキュラムマップを基に、自らが作成した課題レポートを整理することで、学年毎にどのように能力があがっているか確認することができる。実際にこの成果は、各学年の学期当初に学生が受検しているGPS-Academicでの結果として現れている。

さらに、学生自らが、何ができるようになっているのかを客観的に説明できるようにするための、観点と水準を例示する試行を示した。この観点と

水準には、これまで学生が言語化することが難しかった、コンピテンシーやジェネリックスキルに相当する内容を含めていることが特徴である。

ネットワーク情報学部ネットワーク情報学科（入学定員235名）のカリキュラムは、学科全体で管理できるように構造化しているため、学生の学修成果をこのような形で把握することができるが、大規模学科で同じように行うことは難しいかもしれない。しかし、ゼミナールといった単位で個々の教員が試行することはできるであろう。ゼミの受講学生同士が学びの振り返りを相互に行い、その様子を教員が把握した上で学科会議で集約する、といったステップを踏むことで、学科レベルでの学修成果の把握へと進められることが期待できる。

教育開発支援 NEWSLETTER

専修大学教育開発支援委員会広報誌 第52号 (Vol.26 No.2)

発行日 令和8年3月31日
 発行者 専修大学教育開発支援委員会
 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
 TEL.044-900-7857 FAX.044-900-7856
 E-mail fd@acc.senshu-u.ac.jp
 編集協力 (株) 芳文社